

1 クビアカツヤカミキリ（特殊報）

令和6（2024）年6月中旬、尾張地域のモモ生産園地において本種成虫雌1頭（図1）が捕獲されたことから、6月18日に特殊報を発表した。

1 病害虫名

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* (Faldermann)

2 作物名

モモ

3 全国及び本県における発生状況等

- （1）国内では平成23年に埼玉県で初めて成虫が確認されて以来、愛知県（生産園地外）、徳島県、大阪府、群馬県、東京都、栃木県、奈良県、和歌山県、茨城県、三重県、神奈川県、兵庫県の13都府県で発生が確認されている。
- （2）発生地では、公園等のサクラやウメなどで幼虫の穿孔食害による枯死被害が大きく、果樹園ではモモ、スモモ、ウメ等で同様の被害が出ている。
- （3）本県では、平成24年7月、海部地域のサクラで成虫が初めて確認された。以降、同地域から名古屋市南部にかけて、街路樹のサクラ等を中心に、本種成虫やフラス*が確認されている。今回のモモでの成虫確認は、本県の果樹生産園地における初確認である。

*幼虫が樹内を食害しながら排泄する糞と木くずが混じったもの（図2）

- （4）成虫確認園地及び半径50m以内にあるモモの生産園地において調査を行ったが、本種のものと思われるフラスは確認されていない。また、成虫も捕獲された1頭のみであった。

4 形態と生態

- （1）成虫は体長28～37mm。通常、前胸背板を除き光沢のある黒色を呈する。前胸背板は明赤色だが、個体により黒色となる（黒色個体はわが国未報告）。触角と脚部は暗青灰色。前胸背板には4つの小突起を備え、両側部の突起は側方に突出し目立つ。
- （2）樹木内部で蛹から羽化した成虫が6月上旬から8月上旬に出現し、交尾・産卵する。産卵は幹や樹皮の割れ目に行い、8～9日後には卵が孵化し、幼虫が樹木内部に食入する。幼虫期間は2～3年、春～初夏の摂食が盛んであり、この時期にフラスが多く見られる。

5 防除対策

- （1）本種は特定外来生物に指定されており、生きたまま持ち運ぶことは禁止されている。成虫を発見した場合は、その場で直ちに捕殺し、確認が必要な場合もあるので、捕殺個体は保管しておくこと。

果樹生産園地において成虫を発見した場合は、直ちに捕殺した後、病害虫防除室又は該当地域の農業改良普及課に連絡する。

果樹生産園地以外（街路樹や公園、庭木など）で成虫を発見した場合は、愛知県環境局環境政策部自然環境課（052-954-6230）又は市町村担当課に連絡する。

- （2）疑わしいフラスを発見した場合、食入孔（フラスが詰まっている幼虫の穿孔痕）を

見つけ、登録のある殺虫剤を注入して内部の幼虫を駆除する。内部にいる幼虫には薬剤が届きにくいので、針金などでフラスをかき出し、食入孔に散布ノズルをできるだけ深く差し込んで殺虫剤を噴射する。

- (3) 成虫は羽化後樹幹内から出てくるので、被害樹を発見した場合は4mm目合いのネットを地際部から1～2m程度の高さまで巻き付けて成虫の脱出・分散を防止する。この際、樹幹とネットを強く密着させると食い破られやすくなるので、ある程度余裕を持たせて巻くこと。
- (4) 複数箇所に食害がみられる樹木では、内部の幼虫を完全に駆除することが困難なため伐採する。伐採された樹木内でも幼虫は成長し成虫の発生源になるため、伐採樹は放置せず速やかに処分する。
- (5) 成虫防除を目的とする殺虫剤散布は、成虫の発生時期である6～8月に樹冠全面または樹幹部に散布する。なお、薬剤散布にあたっては、最新の情報を確認し、適用作物・使用時期等の使用基準を遵守する。
- (6) 詳細な防除対策は、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所が令和4年3月に公表した「クビアカツヤカミキリの防除法」を参照のこと（農薬登録情報は変更があるので注意すること）

(<https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/chukiseika/5th-chuukiseika12.html>)



図1 クビアカツヤカミキリ雌成虫



図2 食入孔から出たフラス